

# 林業経済学会50周年によせて

林業経済学会 会長 餅田治之

林業経済学会は、林業経済研究会の時代を含めて、50周年の記念すべき年を迎えました。この半世紀を振り返ってみると、日本ばかりでなく世界の森林・林業問題や、またそれらに対する人々の関心は劇的と言っていいほど大きく変化し、それに伴って林業経済学の研究対象もまた著しく変化してきました。例えば農業経済研究の研究手法を取り入れようとしていた時期、基本問題調査会答申を背景に担い手問題が議論された時期、外材の深刻な影響を多方面から分析した時期、森林環境問題について議論が本格化した時期、近代化論に立脚した考察から反近代化論に立脚した議論が登場するようになった時期、地球環境問題として森林・林業問題が議論されるようになった時期など、この半世紀においていわばブームのように研究課題や研究手法の消長が見られました。そうした研究の波を形作ってきたのは、社会における森林・林業の位置づけの変化や、森林・林業研究に対する社会の要請の変化であり、そうした社会的要請を敏感に受け止めてきた研究者側の主体的な意識であったろうと思います。したがって研究課題についてブーム的な消長があったということは、私たちの研究がそれぞれの時代における社会的要請にきちんと対応してきたことを物語る証拠です。そういう意味で、これまでの林業経済学会の半世紀の歴史を評価したいと思います。

と同時に、今日、研究と社会のつながりが希薄になりつつあることも懸念されます。例えば行政が提示する新たな施策に対して、研究者の反応はかつてと比べると敏感ではなくなっていると思われます。また、研究に携わる私たちが、自らの研究分野に関わる社会的課題に対して発言することが必ずしも多くないのも気になります。応用的な社会科学を目指す林業経済学会としては、改めて社会との関わりを考え直す必要があります。今、林業経済学会はプレゼンスの向上を目指して活動しておりますが、社会との関わりを改めて考え直すことは、そのプレゼンスの向上にとっても必要不可欠のことだと思います。この50周年記念誌がそのことを改めて考える契機になることを期待します。